

報道各位

2023年6月30日

公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館

創造の現場 ー映画と写真による芸術家の記録

2023年9月9日 [土] – 11月19日 [日]

広報用画像を更新しました。



「創造の現場」展 チラシ表面

公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館（館長 石橋 寛）は、「創造の現場 ー映画と写真による芸術家の記録」展を開催します。

1953年、アーティゾン美術館の前身となるブリヂストン美術館は映画委員会を発足しました。「美術映画シリーズ」と冠し、1964年までに61人の芸術家を取材して17本の記録映画を製作しました。これらは梅原龍三郎（1888-1986）や高村光太郎（1883-1956）、前田青邨（1885-1977）といった日本の芸術家たちの制作風景や日常の様子を記録した、大変貴重な映像資料です。

プロジェクトの発案者は当館創設者石橋正二郎の長男、石橋幹一郎でした。映画委員会の委員長に就任した幹一郎は「本当に美術を愛し、理解に努力している人びとの助けとなり、また芸術の先達たちの動く肖像画を伝える」ことを念願し、事業を主導しました。その結果、1950年代に盛んになる美術映画において特に近代美術の分野で先駆的な役割を果たし、イタリアの国際映画祭で受賞するなど国内外で評価を得ました。

また、近年当館は現代美術の現場を記録し続けた写真家、安齊重男（1939-2020）の作品を収集しています。安齊は自らを現代美術の伴走者と称し、1970年代からアーティストのポートレートや、一過性のインスタレーション、パフォーマンスなどの撮影を手がけてきました。

本展では「美術映画シリーズ」の全貌をご紹介しますとともに、その取材対象となった芸術家たちによる作品、そして安齊による写真作品を展覧します。当館のコレクションに国内の美術館からの借用作品を加えた約80点で構成します。「美術映画シリーズ」と安齊作品とを並列することで、日本の近現代美術の制作現場を概観することにもなるでしょう。「創造の現場」を捉えた映画と作品の魅力をお楽しみください。

【見どころ】

1) ブリヂストン美術館映画委員会製作「美術映画シリーズ」を一挙公開



ブリヂストン美術館は開館翌年の1953年から1964年までに61人の芸術家取材し17本の映画を製作しました。日本映画近代化の立役者ヘンリー小谷の甥で記録映画プロデューサーの高場隆史や、抽象画家の小谷博貞、青木繁の一人息子で尺八奏者の福田蘭童らが製作に携わり、記録性だけでなく芸術性にも配慮された内容でした。これまであまり紹介されてこなかったこれらの映画について、その全貌をご紹介します。

撮影の様子（左下が梅原龍三郎、右から二番目が高場隆史）

2) 安齊重男によるアーティストたちの制作現場を捉えた写真約30点を展示



安齊重男は自らを現代美術の伴走者と称し、国内外のアーティストたちのポートレートや制作現場を写真によって記録してきました。当館には安齊が生前自ら選んだ206点の写真作品が収蔵されており、それらのなかから特に石橋財団コレクションと関連の深い作家の肖像写真や制作風景などをおさめた約30点をまとめて展示します。

安齊重男《堂本尚郎、作家スタジオ、東京、1980年6月》1980/2017年
石橋財団アーティゾン美術館 © Estate of Shigeo Anzai

3) 日本近現代美術の「創造の現場」を一堂に

「美術映画シリーズ」では1950～60年代、安齊重男の作品では1970年代以降の日本の芸術家たちのアトリエでの制作風景や日常の素顔などが記録されています。映画には梅原龍三郎が実際に左手に絵筆を持って描く姿や川合玉堂の肉声などがおさめされ、貴重な記録となっています。本展はこれらの映画と写真を一堂に集めて日本近現代美術の「創造の現場」を展観する試みです。



川合玉堂（美術映画シリーズ
『川合玉堂』1953年より）



川合玉堂《彩雨》1940年、東京国立近代美術館

【展覧会構成】

第1章 映画のなかの芸術家たち—美術映画シリーズ

梅原龍三郎、川合玉堂、高村光太郎、前田青邨など美術界の巨匠たち取材し、アトリエでの制作風景や日常の様子を記録した、ブリチストン美術館「美術映画シリーズ」。本章では、これらに登場する作家たちの映像とともに彼らの作品をご紹介します。

第2章 写真のなかの芸術家たち—安齊重男

安齊重男（1939-2020）は、自らを現代美術の伴走者と称し 1970年代からアーティストのポートレートや、一過性のインスタレーション、パフォーマンスなどの撮影を手がけてきました。本章では、現在 200 点以上所蔵する当館の安齊作品のなかから約 30 点をご紹介します。

美術映画シリーズ 出演作家一覧

梅原龍三郎、川合玉堂、高村光太郎、鎗木清方、坂本繁二郎、前田青邨

「美術家訪問」シリーズ

伊東深水・川島理一郎・斎藤与里・高村豊周・熊谷守一・平櫛田中・川端龍子
児玉希望・石井柏亭・近藤浩一路・小糸源太郎・木村荘八・北村西望
辻永・中川一政・田辺至、松林桂月・山下新太郎・山口蓬春
梅原龍三郎・中村岳陵・朝倉文夫・中沢弘光・白瀧幾之助・前田青邨
金山平三・奥村土牛・西山翠嶂・堅山南風・飯塚琅玕斎、徳岡神泉・坂本繁二郎
安田鞞彦・和田三造・福田平八郎・有島生馬・松田権六・横山大観
高村光太郎・正宗得三郎・結城素明・石川寅治・榊原紫峰・富本憲吉
吉田三郎・小野竹喬・寺内萬治郎・堂本印象・中村研一・鎗木清方・川合玉堂
小杉放庵・野田九浦・斎藤素巖・中川紀元・岩田藤七
清水多嘉示・森田元子・鳥海青児・山本豊市・林武

【主な作品他】

1



2



3★



4



5



6



7



8



9



10★



- 1) 高村光太郎《手》1918年頃、東京国立近代美術館、撮影：大谷一郎
*展示期間：2023年9月12日[火] - 11月19日[日]
- 2) 山下新太郎《供物》1915年、石橋財団アーティゾン美術館
- 3) 前田青邨《紅白梅》1970年頃、石橋財団アーティゾン美術館
©Y. MAEDA & JASPAR, Tokyo, 2023 C4260 ★
- 4) 富本憲吉《色絵花柳文水指》石橋財団アーティゾン美術館
- 5) 高村光太郎（美術映画シリーズ『高村光太郎』1954年より）

- 6) 前田青邨 (美術映画シリーズ『前田青邨』1957年より)
- 7) 木村荘八 (美術映画シリーズ『美術家訪問 第2集』1954年より)
- 8) 富本憲吉 (美術映画シリーズ『美術家訪問 第7集』1958年より)
- 9) 鐫木清方 (美術映画シリーズ『鐫木清方』1954年より)
- 10) 鐫木清方《一葉》1940年、東京藝術大学

©Kiyoo Nemoto 2023/JAA2300087 ★

【開催概要】

展覧会名： 創造の現場 一映画と写真による芸術家の記録
 主催： 公益財団法人石橋財団アーティゾン美術館
 会場： アーティゾン美術館 5階展示室
 会期： 2023年9月9日〔土〕－11月19日〔日〕
 開館時間： 10:00－18:00 (11月3日を除く金曜日は20:00まで) *入館は閉館の30分前まで
 休館日： 月曜日 (9月18日、10月9日は開館)、9月19日、10月10日
 入館料 (税込)： 日時指定予約制 (2023年7月7日〔金〕よりウェブ予約開始)
 ウェブ予約チケット1,200円、窓口販売チケット1,500円、学生無料 (要ウェブ予約)
 *予約枠に空きがあれば、美術館窓口でもチケットをご購入いただけます。
 *中学生以下の方はウェブ予約不要です。
 *この料金で同時開催の展覧会を全てご覧いただけます。
 担当学芸員： 田所夏子、原小百合

同時開催



ジャム・セッション 石橋財団コレクション×山口晃 ここへきて やむに止まれぬ サンサシオン (6階展示室)

日本は近代を接続し損なっている、いわんや近代絵画をや。写実絵画やアカデミズム絵画に対する反動としての、あるいはその本来性を取り戻すためのものが西欧の〈近代絵画〉であろう。が、写実絵画やアカデミズム絵画の歴史を持たぬ本邦に移入された近代絵画とはなんであろう。

西欧の近代絵画と日本の近代絵画を蔵する石橋財団コレクションを前にして、改めて、山口晃(1969-)はそう述べます。

今回のジャム・セッションでは、「近代」、「日本的コード」、「日本の本来性」とは何かを問い、歴史や美術といった個人を圧する制度のただ中であっても、それらに先立つ欲動を貫かんとする山口晃をご覧ください。

「ジャム・セッション 石橋財団コレクション×山口晃」チラシ表面



石橋財団コレクション選 特集コーナー展示

読書する女性たち (4階展示室)

ヨーロッパでは18世紀以降、読書する女性の姿が描かれるようになります。西洋に学んだ日本近代の画家たちも、同じ画題を取りあげました。本展では、石橋財団コレクションから、女性が生徒として描かれたマティスやカサット、山下新太郎らの作品を紹介します。

その他、19世紀後半の印象派から20世紀の西洋近代絵画、明治以降の日本の近代絵画、第二次世界大戦後の抽象絵画、日本および東洋の近世・近代美術、ギリシア・ローマの美術など現在約3,000点の石橋財団コレクションの中から選りすぐりの作品をご紹介します。

メアリー・カサット《娘に読み聞かせるオーガスタ》1910年、石橋財団アーティゾン美術館蔵

アーティゾン美術館 〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

Tel: 国内 050-5541-8600 海外 047-316-2772 (ハローダイヤル) www.artizon.museum

アクセス：JR 東京駅（八重洲中央口）、東京メトロ銀座線・京橋駅（6 番、7 番出口）、東京メトロ・銀座線/東西線/都営浅草線・日本橋駅（B1 出口）から徒歩 5 分

【広報用図版】

1 点のみ掲載の場合は 2 ページに掲載の図版「撮影の様子（左下が梅原龍三郎、右から二番目が高場隆史）」をお使いください。

掲載時には必ずクレジットをご記載ください。また、文字載せやトリミングはご遠慮ください。

★のついた 2 作品は著作権保護期間中です。ご利用については下記にご相談ください。

■図版は、下記サイトからダウンロードしていただけます。

広報用画像データのダウンロードはこちら

<https://www.artpr.jp/artizon/fromthesceneofcreation>



本プレスリリースについてのお問合せ先
アーティゾン美術館 広報課 松浦・小川・宮武

*一般の方のお問合せ先は 050-5541-8600 (ハローダイヤル) です。

E-mail: publicity@artizon.jp

TEL: 03-6263-0132 (広報課直通・誌面への掲載はご遠慮ください。)

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2